



どうきょう

「踏みにじられた人権
を取り戻す」—JAL争
議団乗員原告団長

「旅客機を安全に飛ばすのがあなたの仕事だ」と、現在の会社での入社教育で言われ、「求められる内容は厳しいが、経営ではなく安全最優先で考えるのは当然だ」と膝を打つたといいます。「航空会社の運行ポリシーは安全第一であるべき。JALは航空会社なのに人員削減計画や経営利益が一番になっていた」

2010年の大晦日にパイロット(乗員)81人、客室乗務員84人が病歴や年齢などの恣意的な基準で解雇された争議で、今もたたかう乗員争議団の新団長として活躍中で

ちかむらかずや
近村一也さん(63歳)

す。

解雇されたのは49歳。破たんで機長昇格訓練が中断させられ、航空労組連絡会(航空連)の議長に就任した時でした。子どもたちの教育費が一番かかる時で会社貸付の住宅ローンもありました。「退職金でローンを相殺されたらマイナス。金利は銀行以上、短期間で一括返済を迫られた」と振り返ります。たたかうために生活の基盤が必要だと思い、再就職し空に戻りました。「妻は給与が支払われない間、動搖せず普通にしてくれた」と感謝を語ります。

1982年3月、JALの自社養成乗務員として中途採用扱いで入社。すぐに大学の卒業証書を手にしますが、給与査定は高卒扱い。会社は「訓練終了後に調整される」と言うも反故にされ、労働組合に相談したことから労働運動に参加。羽田沖墜落事故や123便の御巣鷹山の墜落事故を目の当たりにし、「旅客の命を乗せて飛ぶことの責任」を感じて活動してきました。「解雇されるいわれはない。踏みにじられた人権を取り戻すたたかいです」(菅原恵子)